

TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー ラジオを楽しむ! (6)
- 公開セミナー 第44回名作の舞台裏 『陽炎の辻〜居眠り磐音 江戸双紙〜』
- 「フジテレビ セットデザインのヒミツ展」&「2017 春の人気番組展」
- 東日本大震災関連番組上映会、サテライト・ライブラリー&大学での教育利用ほか
- 次期5年間(平成30～34年度)の事業方針、28年度事業報告・決算を承認

■公開セミナー ラジオを楽しむ!

3月25日、公開セミナー「ラジオを楽しむ!」～ドラマとドキュメンタリーの垣根を越えて～を開催した。「ラジオを楽しむ!」は、横浜、東京、名古屋、大阪、山形に続き6回目の開催となる。今回は、ドラマとドキュメンタリー、実況音声などを織り交ぜ、人々の心に訴えた中国放送とNHK広島との2番組を取り上げ、横浜で開催した。

[登壇者] 増井威司(中国放送 ラジオ局 ラジオ制作部長)

中山果奈(NHK広島放送局 アナウンサー)

[司会] 石井 彰(放送作家)

[鑑賞作品]

RCCラジオドラマ『赤ヘル1975』

(2015.8.6放送/中国放送/60分)

原爆投下から30年、1975年の広島カープ初優勝までの軌跡を描いた小説『赤ヘル1975』(重松清/講談社)をドラマ化し、被爆から70年を迎えた8月6日に放送した。野球の実況も効果的に織り交ぜ、平和の大切さや広島に生きる喜びを生き生きと描いた。

広島原爆の日ラジオ特集『あの日、母は少女だった～被爆の記憶をたどる母と息子の対話』

(2016.8.6放送/NHK広島/50分)

広島で被爆した母と対話を繰り返し、体験を書き残そうとしている息子。親子の心象を朗読(樹木希林、本木雅弘ほか)とドキュメントで綴りながら、被爆71年を迎える広島のある家族の日々を描いた。



番組鑑賞後、石井氏が「皆さんの頭の中に浮かんだ古葉監督の姿、渡邊さん親子の姿がきつと一人ひとり違う。自分の頭の中で映像を作り上げる。これがラジオを楽しむ最大の醍醐味だと思う」とラジオの魅力を述べた。

中山氏は入局3年目のアナウンサー。NHKのアナウンサーは番組を制作するのも仕事の一つであり、特に広島放送局アナウンスでは毎年「広島原爆の日ラジオ特集」を作っており、近年、建物疎開(空襲での火事が延焼しないように防火帯を作るために建物を壊して撤去する作業)に注目し取材を続けてきた。建物疎開には中学生が

8千人動員され、その内の6千人が原爆で亡くなった。番組を企画した理由について、中山氏は「建物疎開の取材でお会いしたのが渡邊弘子さん。渡邊さんは、意志の強い方で『苦労じゃ思うたら生きていかれん』と言い、自分の苦労話は全然聞かせてくれなかったが、この気丈な渡邊さんにも深い傷がある事に気付かされた時、これを番組にさせて頂ければ、原爆は体のダメージだけではなく、被爆から71年経っても心に深い傷を負っている事が伝わると思った」と話した。

中国放送の増井氏は、数々のラジオ番組を作り続けてきたプロデューサー。番組のきっかけについて、増井氏は「重松清さんの原作を読んだら、登場人物がちょうど私と同世代であり、貧しくても元気のいい当時の広島の風景が浮かんできた。また、『中国放送は』とか『上野アナウンサーじゃけ』などの言葉が随所に出てくるので、このドラマはうちの局が作らないで、どこかするのだと思った。中国放送には実況の音が沢山残っている。カープの歴史は原爆に打ち勝つ歴史とも言われているので、被爆70年の8月6日に放送しようと思った」と振り返った。



番組作りの過程で、中山氏は「どういう形式にするかをかなり悩んだ。今回の作品は朗読とご本人たちの声という二つのものが折り重なっている。ドキュメンタリーと朗読で表現する新しい手法に挑戦してみようと思った」という。また、キャスティングについては「まず樹木さんをお願いをしてOKを頂き、親子の話なので樹木さんと義理の親子である本木さんをお願いをした。本木さんは、原爆は初めてされるテーマだったが、樹木さんに勧められたこともありご出演を決意してくださった」と明かした。一方、『赤ヘル1975』はプロの子供達を起用していない。増井氏が「この作品は、上手い子だと



なかなか味が出ない。各所にあたっている時に、映画のワークショップをしている団体の中に、マナブ役をした子がいて、この子なら出来ると思った」、更に「主題歌は、広島の大竹で僧侶をしている二階堂和美さんをお願いし、また、黒田投手にも出演して貰い、広島から発信できる人をキャスティングした」と番組作りに込めた思いを語った。

増井氏も中山氏も広島出身。広島の平和教育について、中山氏は「平和教育の意味も、しっかり学び、伝えなければいけない事も分かるが、学校でやる事はきちんと勉強しても、プラスアルファで被爆の番組を見るかと言わ



れたら見なかった。大学で東京に出て、広島は特別で、他の地域の人はあまり知らないという事に気付き、広島に生まれた者として、伝えていく責任がある

という思いを持った」と明かした。増井氏は「僕たちの子供の頃、今から40年位前は、まだ原爆に怒りみたい

なものがあった。今では祈りのほうが強いが、原爆に対しての怒りや、どれだけ悲惨だったかがテーマになる事が多く、それを子供時代からずっと教わってきた。今は、一般の方がどこまで身近になって考えられるのかがテーマなのだと思う」と述べた。

石井氏が「NHKの作品はドキュメンタリーにドラマを持ち込み、中国放送の作品はドラマに実況中継という真実を持ち込むという、正反対からのアプローチがラジオで始まっている」と説くと、中山氏は「被爆から72年。年月が進むほど、ドキュメンタリーという形は難しくなる。そうなる昔あった素材を掘り起こし、誰かの足跡を辿るドラマになっていく。今はその融合ができる最後の時。それが新しい時代の始まりだと思う。私のように、もう分かったという気になる若い人を作らないためには、ドラマなど、新しい手法を取り入れていかなければいけない時代にきていると思う」と続けた。

最後に、ラジオドラマを作っている高校生から「イメージネーションをしやすい音の作り方はあるか」「朗読と実際に聞いたことを台本に入れる時の書き分け、使い分けはどのように考えたのか」などラジオドラマ作りに対する熱心な質問が飛んだ。また、終了後、「ラジオの良さを再認識した」「どちらの作品も情景を想像して、心が揺さぶられた」など、多くの感想が寄せられた。

■公開セミナー 第44回名作の舞台裏『陽炎の辻～居眠り磐音 江戸双紙～』

4月28日、制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る「名作の舞台裏」を開催した。今回は、佐伯泰英氏の原作小説をドラマ化、2007年の第1シリーズから息の長い人気を博し、今年1月に完結編を迎えた時代劇『陽炎の辻～居眠り磐音 江戸双紙～』（NHK）を取り上げた。

[ゲスト] 山本耕史(出演) 一柳邦久(制作)

西谷真一(演出)

[司会] 渡辺紘史(放送人の会)



セミナーでは、十年前に放送された第1シリーズ第1話を視聴した。主役の坂崎磐音を演じた山本氏は、「磐音が豊後関前から出てきて、橋の上でヒロインのおことと出会う登場シーンは、『これから何が始まるんだろう』という高揚した気持ちでいたことを覚えている。完結編で7年ぶりに演じたが、十年前と比べると、子供がいたり道場を一人で背負っていたり十年の歴史を感じたし、坂崎磐音という人物も成長したんだと改めて感じた」と振り返った。西

谷氏は「このシーンを撮るために、お二人が衣装を着て現場に歩いて来た時、降っていた雨がさっと止んで青空が見えてきた。その佇まいに心が震えて、これは絶対に成功すると思った」と語り、「自分は山本さんが大好きで、とにかくそばにいら



ただ嬉しかったのを覚えている。その心の震えみたいなものが映像にも出ていた」と懐かしんだ。一柳氏は「この原作を見つけた時、時代小説というものを離れて、青春ドラマとして面白いと思った。時代劇離れが進む中、今まで時代劇を見たことのない若い人に見てもらえる『新しい時代劇』を作りたいと思っていたので、びったりの原作だった」と語った。また「脚本の尾西兼一さんは、ずっと現代物を書いていた人。古い時代劇の脚本家ではなくて、トレンドドラマを書いていたような、テンポのある人に書いてもらいたい、それで時代劇を変えたいという思いがあった。佐藤直紀さんの、フラメンコギターを生かした音楽もマッチしていた」と明かした。

主役に山本氏をキャスティングしたのも一柳氏。当時の山本氏は大河ドラマ『新選組! (2004年)』の土方役で人気を博しており、「殺陣の上手さと、今いちばん脂が乗っ



一柳 邦久

ている役者だということで決めた」という。「時代劇の主役にチャーミングな若い人をつかまえるのは至難の技で、若く売れている俳優は時代劇をやりたがらない」と一柳氏。

一方でオファーを受けた山本氏は、「確かに時代劇は、時間や労力、所作、殺陣や着物姿など、若い俳優にはハードルが高い。でも自分は、そのハードルの高いものに興味があったし、時代劇をやっているからこそ、ずっと長く続けられる俳優になれると思っている」と語った。

役作りについて山本氏は、「聲音の周りに個性的な人物が多かったので、個性を出すよりは白に近い主人公がいいと思った。聲音の人生そのもののように、人に助けを求めず、人にも押しつけず、真ん中で個性を押し殺しながら、ある瞬間ものすごく情熱的に赤くなるとか、冷静沈着で残酷な青にもなる」と振り返った。また殺陣も独特で、『居眠り聲音』の名のとおり、ずっと敵の刃をかわし続け、攻撃するのは最後の一手。受け身が主という特徴的な殺陣は、それまで経験してきた普通の殺陣とはずいぶん違っていったという。一柳氏が「殺陣は、下手な俳優と上手な俳優とでは収録にかかる時間、つまりかかるお金が全然違う。山本さんは五十手くらいを連続で撮れる。時代劇が廃れた原因の1つにコストの面もあるので、こういうすごい殺陣ができ

る俳優さんがいるのは素晴らしい」と賛辞を送ると、山本氏が「お金がかからない俳優ということですかね」と笑いをとる場面もあった。

現在は時代劇のオンエア時間が減り、時代劇離れが起きて久しい。一柳氏は「時代劇が少なくなると、演出家も俳優も育たなくなり、大先輩たちの技術や技が継承されなくなる。ドラマ界全体の財産が減ってしまう」と嘆く。西谷氏は「時代劇は、愛や憎しみという人間の普遍的な感情を、現代劇以上に濃縮して描ける。現代劇ではタブーとされることもストレートに描ける良さがある」と言う。脚本の尾西氏からは、「テレビ局が時代劇を捨ててはいけぬ。視聴率など気にせず時代劇を続けることで何かか起爆剤となり、新たなヒーローを作り上げることもできる」というメッセージが寄せられた。山本氏も「今は一生懸命に時代劇を作って、若い俳優が少しでも時代劇に触れる機会を作り、技術をつけていくことが、時代劇を繁栄させる第一歩だと思う」と語った。

会場には、「このドラマをきっかけに時代劇に興味を持った」というファンもおり、時代劇を継承する制作者たちに熱い拍手を送っていた。



山本 耕史

■「フジテレビ セットデザインのヒミツ展」

2月24日～4月9日、企画展「フジテレビ セットデザインのヒミツ展」を開催した。『VS嵐』やドラマ『カインとアベル』など、人気番組の実物セットや小道具、デザイン



画や台本等を展示。制作過程のデザイン画と完成したセットを一緒に展示することで、美術デザイナーの発想と番組を魅力的に見せる工夫や

仕掛けのヒミツを知ることができる企画展示となった。また、3月18日には「セットデザインのヒミツツアー」を開催。普段は各番組の視聴者でもある参加者が、美術デザイナーの話を直接聞くことができる貴重な機会となった。

期間中、2万4000人を超える来場者があった。さらに、1日の平均来館者数は619名で歴代企画展5位を記録し、盛況のうちに幕を閉じた。来場者からは「美術デザイナーの仕事内容やセットの制作過程がわかった」「テレビの見方が変わった」等の声があった。



■「2017 春の人気番組展」

4月21日～6月4日、地上8局、BS7局の協力を得て、恒例の「春の人気番組展」を開催した。各局の新番組



や人気番組のポスター、台本、関連グッズ、番組で使われた小道具、セット模型・デザイン画などを展示した。今回は、TBS『小さな巨人』

やフジテレビ『貴族探偵』をはじめ、新ドラマやバラエティのセット模型やデザイン画が多数展示された。テレビ東京『釣りバカ日誌 Season 2』で使用した釣り道具の展示もあり、これまで以上に充実した内容となった。また、特別展示として、「大村克巳 with NEWS ZERO 写真展」も同時開催した。

来場者からは、「セット模型など貴重な展示を見られてよかった」「この企画展をきっかけに、番組を観るのが面白くなりそう」「BSにも面白い番組があることを知った」等の感想が寄せられた。



■東日本大震災関連番組上映会

3月7日から10日までの4日間、7階大会議室を会場に「テレビとラジオが伝えた3・11 ～放送ライブラリーの番組を視聴する会～」を開催した。今回取り上げた8番組は次の通り。

「NHKスペシャル 3.11 あの日から1年 38分間 ～巨大津波 いのちの記録～」(2012年NHK)、「NNNドキュメント'11 3・11大震災シリーズ5 がんばれ!三鉄」(2011年テレビ岩手)、「ラジオ深夜便 明日へのことは 震災復興インタビュー 災害FM“りんごラジオ”元気に発信中 高橋厚」(2012年NHK)、「テレメンタリー2012 “3.11”を忘れない20 闘う先生」(2012年福島放送)、「明日へ ～船越小学校・子どもたちが向き合ったあの日～」(2014年IBC岩手放送)、「OH!パンドス特別編 360° 関上日和山 シルエット」(2015年ミヤギテレビ)、「3.11みやぎホットラインスペシャル 夢の行方」(2015年東北放送)、「TUFルポルターージュ 常磐線竜田駅 ～原発最寄り駅の日常～」(2015年テレビユー福島)。来場者は214人。

■サテライト・ライブラリー&大学での教育利用

[岡山県立図書館]

6月24日(土)から、放送ライブラリーの公開番組が視聴できる「サテライト・ライブラリー」を開始した。

郷土研究、調査に利用されることを目的とし「OKAYAMA情報チャンネル」の名称で2階アクセスコーナーの視聴用パソコン4台で、岡山県に関する番組22本を個別視聴できるようにした。視聴できる番組は随時追加する予定。その他、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、諫早市立諫早図書館でサテライト・ライブラリーを継続中。

[長崎県立大学]

本年度、国際情報学部「映像研究」(村上雅通教授・前

期)と、「演習Ⅱ」(同・通年)の二つの授業にテレビ番組3本が利用された。受講生数は合計30名。

[上智大学]

本年度前期、文学部新聞学科「デジタルアーカイブ論」(柴野京子准教授)の授業に、放送番組センターが著作権を持つテレビ番組16本を利用している。これは、テレビ番組を使って番組アーカイブの理論を実践的に学ぶもので、利用している番組は当センターの制作番組である。授業の成果であるアーカイブデータは、放送ライブラリーの番組情報として公開する予定。受講生数は20名。

■TBSテレビ新入社員研修で来館

5月24日、25日の二日間、TBSテレビ新入社員32名(各日16名)が新人研修の一環で、放送ライブラリーに来館し、8階視聴ホール、9階常設展示と春の人気番組展を見学した後、各自が事前に設定した課題に従って番組を視聴するなど、熱心に研修に取り組んだ。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーではテレビ番組16,025本、ラジオ番組4,273本、テレビ・ラジオCMを10,796本、劇場用ニュース映画2,683項目を横浜の施設内で一般に無料公開している。29年度4月から6月に追加公開した主な番組は以下の通り。

【テレビ番組】

◇『NNNドキュメント'14 反骨のドキュメンタリスト 大島渚「忘れられた皇軍」という衝撃』2014年1月13日放送・日本テレビ放送網

◇『中京テレビ開局45周年ドラマ マザーズ』2014年10月18日放送・中京テレビ放送

◇『いしぶみ ～忘れない あなたたちのことを～』2015年8月1日放送・広島テレビ放送

【ラジオ番組】

◇『遠くなる戦争を語り継ぐ 女性ノンフィクション作家の対話』2015年8月16日放送・NHK

■次期5年間・平成30～34年度の事業方針、28年度事業報告・決算を承認

5月31日開催の第1回理事会で、次期5年間(平成30～34年度)の事業方針に関する最終報告があり、次期5年間の「主な事業項目」および「財政シミュレーション」とともに承認された。同方針は、昨年秋から事業運営委員会を中心に審議を進めてきたもの。事業方針の骨子は以下の5項目である。

(1) 公開番組の権利処理に厳密性が求められ、処理が必要とされる著作権等の件数が増加するなか、業務委託も導入して権利処理を促進し、公開番組の一層の増加に努める。

(2) 平成32年度に予定する番組視聴システムの更新は、IT技術の進展や4K・8Kの実用放送等を踏まえ、効率的なシステム構築に取り組む。

(3) 事業の全国展開は、サテライト・ライブラリーの設置と大学の講義における公開番組の利活用を柱として、放送事業者の理解・協力を得て着実に推進する。

(4) 常設展示、企画展、公開セミナーなどの付帯事業は、現状の事業規模を維持する。オリンピックなど放送と深く関わるビッグイベントに関する企画展や番組上映会は、放送事業者との連携を図り、積極的に開催する。

(5) 出捐金は、マイナス金利の経済情勢を考慮し、当面現状を継続する。一方、基本財産は、現在の運用方針を継続して運用利率2%台の維持に努めるとともに、売却益2億円を確保することなどにより、100億円に積み増

し、財政の安定化を図る。

平成28年度事業報告ならびに収支決算は、同31日の第1回理事会、6月19日の定時評議員会に諮り、それぞれ承認された。

[平成28年度事業報告の概要]

28年度は、24年度に決定した「向こう5年間の事業方針」、および当期事業計画に基づいて番組の権利処理体制を強化し、番組の収集・保存・公開を進めるとともに、各地の公共施設と提携したサテライト・ライブラリーの設置、大学教育における公開番組の利活用を本格的に実施するなど、全国展開の一層の推進を図った。

財政においては、マイナス金利と円高の影響によって、債券運用は厳しい環境にあったが、平成26年度に策定した「当面の運用方針」に則って、基本財産の運用収益向上を図り、超長期債や仕組債の活用などによって、運用利率は前年度比マイナス0.09ポイントの2.21%を確保した。

財源のもう一方の柱となる民放とNHKの出捐金は前年度に引き続いて、1億6,170万円の規模が維持された。

また、30年度から始まる次の5年間を見据えて、30～34年度の事業方針を検討し、安定的な事業推進体制の構築を目指した。